

国内研修報告

私は今回山形県小国町に国内研修に行ってきました。

主な行程は町役場の見学、町の施設の見学、町長との面会、町内見学、食文化体験でした。山形県小国町は人口 7887 人、県内で 2 番目に大きな町です。山形県で 4 位の高齢化率で少子高齢化の問題が顕著になっています。町の土地の 9 割以上が森林であり、その木材を使用した建物等もあります。その森林を活かして白い森の国おぐにとして町の活性化を図っています。その白い森の国おぐにの活動としては、伝統文化であるつる細工や、古田歌舞伎、狩猟などで生計を立てていたマタギと呼ばれる人々の文化であるマタギ文化などを伝えていくことや、小国町の良さである四季折々のイベントを紹介したりしています。まずはじめに私たちが見学したのは町役場でした。町役場は小国町で育った木を使って建設されていて町長室の扉などもその木材を使用されていました。こぢんまりとした役場で、各課の部屋を周り案内してもらいました。役場の案内をしていただいた中でも、私が一番記憶に残ってるのは駐車場です。小国町は豪雪地帯で毎年たくさんの雪が積もってしまいます。ですが、駐車場は毎日使うので雪が積もってしまうと使えなくなってしまいます。そこで、小国町役場の駐車場はアスファルトの下にお湯を流すという工夫をしているそうです。その熱が雪を溶かし、実際に雪が積もらずにスムーズに利用できるようになっていました。このように、各地方の気候に合わせてとられている対策の例が身近なところにあるということを知れてよかったです。施設の見学では、町の問題が顕著に現れているなど感じました。例えば、高齢者施設では、住民の高齢化が進み利用者の方が増える一方で、入居者オーバーになってしまって希望通りに利用できないなどの問題が表面化されていました。小国町立病院では利益が出ないことも問題となっていました。その後お邪魔した小国町立小国小学校は 2012 年に建て替えられたため建物がすごく新しく、画期的な校舎で元気いっぱいの子供さんがいました。ここでも乾燥室があったり、町の木材で作られた木質チップボイラーシステムを活用したりと雪国の生活に配慮した学校づくりが行われていて、生徒さんのことを第一に考えた学校だなと思いました。町長にもお忙しい中お時間を作っていただきお話を聞かせていただきました。おもに町への想いや、これからのことを聞きました。また小国町のまちづくりのお話も聞きました。小国町の産業構造としては、第二次産業が主産業であり、山村にはまれな就業構造になっています。第一次産業は年々減少していき、第三次産業が年々増加している形になっています。これは日本全体の産業の構造と変わらないようです。財政規模の推移は町立小学校の建設があった 2012 年度以外は大きな推移はなく、2000 年以降は縮小傾向にあります。また、町立小学校は 9 校、中学校は 6 校ありましたが、適切な教育環境を維持するために現在は小学校と中学校それぞれ 1 校ずつしかありません。そして、町の施設を見学したなかで一番記憶に残っているのは町の憩いの場になっている場所です。そこは、元は保育園だった場所で、卓球台

やわなげがおいてあり地域の人の憩いの場としてお昼時には賑わっている場所でした。そこで勤めていらっしゃる方が地域おこし協力隊として小国に来て地域を活性化させる方でした。地域おこし協力隊とは、エントリーした方が小国町のような比較的小さな町に活性化を目的に赴き、一定の期間その町で住民の方々とともに活動、生活をする方々です。その方がいろいろな話を聞かせてくださいました。地域おこし協力隊をする前はボランティアとして地域活性化を行っていたことや、地域おこし協力隊の方が赴任先にきて最初に生活するときは右も左もわからず、それを助けてくれる人が町の住民の方々にそれを機に住民の方々も一致団結することなど実際に地域おこし協力隊として働いているからこそわかることをたくさん教えてもらいました。最後に食文化体験をしました。食文化体験では早稲田大学の方々と一緒におこわと豚汁、きくらげのクルミ和えなど現地の方々に作り方を教わりながら作業に励みました。宿舎で夜ご飯を食べた時にも思ったのですが、甘く味付けされたものが多く、それも山形の郷土に適したものなのかもしれないと思いました。この小国での体験を通して私はまず自分の住んでる町との違いが明確であることを改めて感じました。首都圏と農村部ではそもそもの土地が違い、気候も違い、共通点を探すのが難しいほど異なる点が多いのは元からわかっていましたが、それ以外にも自分が当たり前だと思っていたことが小国町にはなかったりと差を感じることも多々ありました。近くのコンビニへ行くのに 30 分ほど歩かなければいけなかったり、バスが 1 日に数本しかなかったりと交通の便が良い首都圏に住んでいる私たちからしたら不便な点もあり、当たり前が当たり前ではないことを痛感しました。しかしそんなアットホームな町の小国だからこそ住民の方々の結束が強く、すごく暖かい方ばかりでした。その暖かさを感じたのは私たちが憩いの場になっている施設に訪れたときです。案内された部屋にお邪魔するとテーブルに何皿も料理が並んでいました。美味しそうな煮物や、手作りの大福までありました。私たちがここへ来ることを知って、近所の住民の方々が作って持ち寄ってくださったのです。それだけでなく、はるばる来た大学生に会ってみたいからと雪の道を歩いてわざわざ来てくださった住民の方もいました。そこですごく人の優しさに触れた感じがしました。きっとこんなことは自分たちの住んでいる東京や神奈川では体験できないと思います。それは個々が独立して住民の結束も弱まっているし、わざわざ他人のために優しさを振舞ってくれることも少ないだろうと思ったからです。そこもまた、私たちが生活している町との違いでもありました。「限界集落だとか言われているけど、住民の方々は限界集落だとか何にも気にしていないし、そんな風に思って欲しくないから余計なおせっかいだと思っている」と、町長と面会させていただいたときにもおっしゃっていました。まさにその通りだと思いました。その場に住んでいない人たちが勝手に限界集落という名をつけ、限界集落ではないところを限界集落にしてしまっているのかもしれないと深く考えました。小国の方々の暖かさや優しさに触れ、またその住民の方々の強さに触れて限界集落と呼ぶことに違和感を感じました。日本には少なからず、限界集落と呼ばれている地があると思います。しかし、そこは本当に限界集落なのだろうか、私たちがそう決めつけてしまっているだけなのではないかと思いました。これが小国で学んだ一番のことだと思います。自分の足で行ってこそわかることでした。またこのこと地域おこ

し協力隊の方の考えは深く関わりがあると思いました。地域おこし協力隊になる方の動機は様々だと思います。しかし、私は今回小国に行くまで地域おこし協力隊のことも全然知らなかったのですが、知る機会になって、限界集落と深い関わりがあることを学び、限界集落にしない、限界集落ではないという自分の強い思いを証明するためという動機もあるんだなということを知りました。これから、大学生活がまだ続くので国内研修を利用してたくさんの経験を積みみたいです。そして、将来のカギとなるものを見つけられたらいいなと思います。